

20200415 スプリング・エフェメラルについて

1. その特徴

早春の花として有名なカタクリは、地中深くに球根を持って越冬する。地上に顔を出すのは本州中北部では3月、北海道では4月で、これはほぼ雪解けの時期に当たる。つまり雪解け直後に地上に顔を出し、すぐに花を咲かせる。花はすぐに終わり、本格的な春がくるころには葉のみとなる。葉も6月ころには黄色くなって枯れ、それ以降は地中の球根のみとなってそのまま越冬する。その地上に姿を見せる期間は約2ヶ月だけである。

このカタクリのように、春先に花を咲かせ、夏までの間に光合成を行って地下の栄養貯蔵器官や種子に栄養素を蓄え、その後は春まで地中の地下茎や球根の姿で過ごす、という生活史を持つ植物が、落葉樹林の林床にはいくつもあり、そのためそのような森林の林床は、春先にとともにぎやかになる。このような一群の植物を春植物、スプリング・エフェメラルという。

スプリング・エフェメラルと呼ばれる植物は、いずれも小柄な草本であり、地下に根茎や球根を持っているほか、花が大きく、華やかな色彩を持つものが多い。小柄であることは、まだまだ寒い時期であり、高く伸びては寒気に耐え難いこととともに、花に多くを割いた結果とも考えられる。また、地下に根茎や球根を持つのは、気温も低く、光も強くない春先に素早く成長し、まず花をつけるために必要である。例外的にシヨウジョウバカマは、ほぼ同時期に花を咲かせるが、常緑性で、年中葉をつけている。

2. 生育環境

スプリング・エフェメラルは、温帯の落葉広葉樹林に適応した植物である。冬に落葉した森林では、早春にはまだ葉が出ていないから、林床は日差しが十分に入る。この明るい場所で花を咲かせるのがこの種の植物である。やがて樹木に新芽が出て、若葉が広がり始めると、次第に林内は暗くなるが、それでも夏まではやや明るい。この種の植物は、この光が十分にある間に、それを受けて光合成を行い、その栄養を地下に蓄える訳である。したがって、これらの植物は森林内に生育しているものの、性質としては日向の植物である。

日本の場合、落葉広葉樹林帯に当たるのは、本州中部以北、あるいはそれ以南であれば標高の高い地域であり、日本全体から見れば、北方系の要素と言ってよい。ただし、実際にはそれ以南の地域でも見られるものがある。特に、里山はそれらが比較的によく出現すると言われている。つまり、人為的な攪乱を連続的にうけ、それによって常緑樹林帯にありながら落葉樹林が成立することから、落葉樹林帯の植物は侵入しやすかったのだというのである。ただし、里山の形成は、どうさかのぼっても2000年だろうから、それ以前はごく限られた環境で細々と生き延びていたのかもしれない。

3. 動物との関係

スプリング・エフェメラルは、虫媒花である。春の早い時期に活動を始める少数の昆虫がその媒介を行う。多くは植物体に比べて大柄な花をつけるのは、それほど数の多くない活動中の昆虫の目を引くためであろう。このような花の受粉を担っている昆虫は、北方系の昆虫であるマルハナバチの冬眠から目覚めたばかり

りの新女王蜂や、低温環境下でも活発に活動できるハナアブ科のハエ類が多い。例えばカタクリやエゾエンゴサクの花は、マルハナバチの新女王蜂に受粉を依存しており、フクジュソウの黄色の皿状の花は、典型的なハナアブ類に適応した花の形態を示している。

4. 代表的な植物

ヨーロッパでは、ブナ林の春の花としてよく知られており、栽培されるものも多い。球根や根茎で植える、春の花にはその例が多い。

日本産で代表的なものとしては、以下のようなものがある。

キンポウゲ科

キクザキイチゲ・ユキワリイチゲ・アズマイチゲ・イチリンソウ・ニリンソウなどのイチリンソウ属
フクジュソウ・セツブンソウ

ケシ科

エゾエンゴサク・ヤマエンゴサク・ムラサキケマン・ジロボウエンゴサク

ユリ科

カタクリ・ショウジョウバカマ・ヒロハノアマナ・バイモ属(コバイモ類)



フクジュソウ・・・花弁が13枚

ガク



ハナアブ



マルハナバチ

